

「後北条五代」とその後（小田原城）

応仁の文明の乱（応仁元～文明9年 1467～1477年）足利将軍家及び管領相統問題をきっかけとして、東軍細川勝元、西軍山名宗全とが京都で大乱によって足利将軍の権威は地に落ち、ついに明応2年（1493）管領（支配者）、細川政元によって十代将軍だった足利義材が将軍の座から追放されるという事件が起きている。

また、応仁の乱の戦火が地方に飛び火したことによって、地方も戦乱の時代を迎えることになった。いわゆる「戦国時代」の幕開けである。室町時代、関軍には、室町時代の出先機関として鎌倉府が設置され、そのトップが鎌倉公方とか関東公方といった。

しかし、足利成氏のとき将軍義政と対立して、常陸国（茨城県）の古河に退き古河公方と呼ばれていた。

そして義政が足利成氏の代に鎌倉公方として送り込んだのが、足利政和であった。ところが政和は鎌倉に入ることが出来ず、伊豆の堀越を本拠とした。その為 関東に古河公方と堀越公方の二人の「鎌倉公方」が生まれてしまった。

関東の争乱状態に拍車をかけたのが、関東管領上杉家内部の争いだった。特に「両上杉」と呼ばれていた山内上杉と扇谷上杉の対立は熾烈だった。

北条早雲が関東に進出することを考えた背景に、こうした条件があったのである。北条早雲が関東進出のターゲットとした小田原城の大森氏は山内上杉氏の重臣であり、相模中央部から東部・三浦半島に勢力をもっていた三浦氏は扇谷上杉氏の重臣だった。

北条早雲

伊勢新九郎（北条早雲）は堀越御所、足利正知没後の紛糾した伊豆国に攻め入れ、韮山城を居城として、64歳で没するまで、ここに住んでいた。現在韮山高校の辺りが早雲の居住の場所韮山城

韮山城

韮山城（静岡県伊豆の国市韮山） 室町時代後期から戦国時代にかけての日本のお城。平山城。15世紀末に北条早雲の関東経略の拠点として整備され、後北条氏の関東支配後も伊豆支配の拠点としてその持ち城であったが、天正18年には豊臣秀吉による小田原征伐において激しい攻防戦を経験している。

籠城の異称を待つ。歴史 築城年ははっきりしないが「北条五代記」によると文明年間（1469～1486）に堀越公方 足利正知の家臣・外山豊前守が城を造ったのが始まりとされている。始めはあまり大規模なものではなく、延徳5年（1491）に堀越公方 足利茶々丸を攻め滅ぼした伊勢盛時（北条早雲）によって後北条の領有となり、同年から早雲によって後北条の本拠地として本格的に造営された。早雲はここを拠点に伊豆の各拠点の支配を進め、後に相模に領土を広げた後も小田原城に移ることなく、没するまでここを居城とした。

その後も小田原城を中心に関東を支配する後北条氏の重要拠点の一つとなり、永禄末年には時の、当主・北条氏康の四男・氏規が城主として入り、伊豆支配の中心地とした。

しかし後北条氏は天正18年（1590）の小田原征伐では、ほぼ天下統一していた豊臣秀吉の大幅な攻勢を受ける。韮山城にも豊臣秀次の軍勢が迫ったために氏規は籠城して戦い、北条方は総勢約三千6百、豊臣方は総勢約四万四千と伝えられる大きな戦力差の中で約百日間後に開城した。



小田原駅西口

小田原城（国指定史跡）

小田原城は文亀元年（1501）までに伊勢宗瑞（北条早雲）が大森藤頼から奪い、以後 北条五代（早雲・氏綱・氏康・氏政・氏直）の本城として約100年にわたり拡張、整備された。

永禄4年（1561）には長尾景虎（上杉謙信）同12年（1569）武田信玄に相次いで攻撃を受けたが、城の守りを固め籠城により退けた。

天正18年（1590）天下統一を目指す豊臣秀吉との小田原合戦に際し、周囲約9キロにわたり、堀と土塁によって城下を取り囲んだ総構を築き守りを固め籠城しましたが、支城が次々と落城し、ついには開城した。

北条氏の滅亡後は、徳川家康の重臣、大久保忠世が城主となり、城は三の丸以内に規模が縮小されると共に、北条時代の城を改変し、三の丸外郭を構築するなど近世城郭の原型が築かれた。

寛永9年（1632）稲葉正勝が城主となり、その子 正則の代には、天守閣に櫓や城門を各所に設け、石垣や水堀による近世城郭へと大きく生まれかわった。

その後 貞享3年（1676）に大久保氏が再代城主になったが、元禄16年（1703）の元禄地震で天守を始めすべての建物が焼失するなど 何度も地震の被害を受けた。

小田原城は、江戸幕府の西の守りを固める防衛上の要衝として、又、幕藩体制を支える譜代大名（大久保氏・稲葉氏）などの居城として幕末まで重要な役割を担っていた。

明治3年（1870）に廃城となり、天守閣などの主要な建物は解体された。

石垣山（一夜城）

小田原城を包囲した秀吉が長期戦に備え本営に備えて本営として築いた陣城小田原城を見下ろす早川西方の山上に複数の曲輪を配し、東西550メートル南北275メートルものの規模と瓦葺の建築や天守台まで備えた関東初の総石垣の城郭は、北条氏を威圧した。

完成時に周囲の樹木を伐採し、一夜で築いた様に見せたとする一夜城の伝説を持つが、実際は秀吉自身が京都の聚楽亭や大阪城の普請に匹敵すると豪語した程大工事で完成まで昼夜兼行で80日余りを要した。

その後の北条氏

将兵の助命と引き換えに切腹を申し出た五代氏直は高野山追放され氏政・氏照は切腹へ、北条氏の旧領は、徳川家康に与えられた。

三河譜代の 大久保忠世を4万石（のちに4万5千石）

大久保忠世（第一代）

大久保田忠隣（第二代）

稲葉正勝（第六代） 寛永9年（1632）三代将軍家光の乳母を務めた春日局の子で幕府老中職を務めていた稲葉正勝が8万5千石小田原城の城主一入城後2年で没38歳

稲葉正則（第七代）（1632～1696）稲葉正勝の後は、若干12歳の正則が継ぎ、以降五十年にわたり小田原城主

稲葉正通（第八代） 1685年越後国高田城に国替となる

大久保忠朝（第九代） 貞享二年（1685）稲葉正通が越後国 高田城に国替となると翌三年、幕府老中、大久保忠朝が下総国 佐倉城から十万三千石で入城。大久保忠隣が改易になってから実に72年以後、大久保氏は明治までの約200年に及び小田原を治めた。

春日局

平正7年（1579）～寛永20年（1643）明智光秀の重臣、斎藤利三の娘で名を「福」といい稲葉正成の妻となり、正勝を生みました。後に徳川家光の乳母となり将軍家の世嗣決定に尽力した。

中宮和子から「春日局」という号をもらい、家光からも一万石を与えられて大変重んじられ、国政にも大きな影響力を持つようになった。

小田原城と小田原合戦攻防図

天正18年(1590)4月、関東最大の勢力を誇る戦国大名小田原北条氏の本拠地小田原城は、全国統一を推し進める関白豊臣秀吉率いる諸大名の大軍に包囲される。

中世最大規模の城

北条氏の当主、氏直は、臣従に迫る豊臣秀吉と交渉を続ける一方で小田原城を始め諸城強化し、総動員態勢を整える。特に小田原城に城下の街ごと囲む全長9キロに及ぶ長大な大外郭を構築し、決戦に備えていた。

結果的に交渉は決裂。氏直は国境線を固めるとともに小田原城に主力を投入、さらに領内100ヶ所に及ぶ支城の防衛を固めて防衛体制を整えた。

小田原城を包囲する戦国の英雄たち

豊臣方の軍勢は水軍合わせ22万。徳川家康らを先鋒とする秀吉の本隊は、東海道、前田利家、上杉景勝(上杉謙信の養子、豊臣秀吉の五大老の一人となり会津120万石 1555~1603)封じられる北陸勢が上野国(群馬県)から、北条氏の領国に侵攻の長宗我部元親(戦国時代の武将で土佐の大名)九鬼嘉隆(武将 紀伊九鬼浦 三重県尾鷲市九鬼町 中世伊勢熊野の海上豪族水軍)らの率いる水軍が兵員、物資を搬送し、海上封鎖に従事した。大外郭の出現により、中世最大の規模を誇った。

小田原城には、6万とも伝える人々が籠り、豊臣秀吉、徳川家康を始め、織田信雄、蒲生氏郷(安土桃山時代の武将、織田信長、豊臣秀吉に仕え会津92万石を領した)羽柴「豊臣秀次」、宇喜多秀家、池田輝政(安土桃山時代の武将、織田信長、豊臣秀吉に仕えて、長久手、小田原に戦う。関が原の戦には徳川家康に属して功を立て播磨を与えられて姫路城主なり、さらに備前、淡路を得た)堀秀政など、名だたる戦国の英雄を迎え撃ち三か月余りに及び攻防戦を展開する。

秀吉・石垣城築城

小田原城の攻略に当たり、十分な兵量、資金を用意して長期戦の構えて臨む秀吉は、壮大な石垣城を開き、本営を早雲寺から移動。

淀殿や参陣諸将の女房衆を召し寄せ、また、千利休ら茶人や芸能者を呼ぶなど長陣の労を慰めた。

北条氏の降伏

北条方は各地の諸城に籠って防戦し、機会を見て反撃に転じる作戦であったが、主力の籠り、小田原城を封鎖されたまま各地の支城を撃破され、次第に孤立していった。同年7月に至り、北条氏直は城を出て降伏を申し入れ、自らの命を引き換えに籠城した一族・家臣や領民の助命を願い出る。しかし秀吉はそれを認めず氏直の父・氏政とその弟氏照らに切腹、氏直に高野山追放を命じここに戦国大名小田原北条氏は滅亡した。この合戦の過程で、関東ばかりでなく、伊達政宗ら東北の諸将も秀吉に臣従する。その結果天下統一の事業が達成され、北条氏の滅亡とともに戦国時代も終わりを告げる。

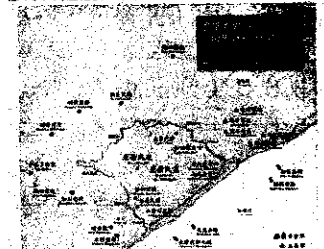
石垣城に参陣した武将たち

堀秀政(1553~1591)美濃の豪族 堀秀重の子 織田信長に仕え側近として活躍信長の伊賀攻めの年、近江長浜城主となる。秀吉に従い羽柴姓を与えられ、小牧長久寺の戦や紀州攻めで活躍した。その功績により越前加賀に18万石の領土を与えられて北庄城に入り、北国支配の中心となった。小田原合戦では先鋒として出陣

石垣山一夜城のご案内

今回は、石垣山と呼ばれていましたが、天正18年(1590)豊臣秀吉は北条氏を包囲し、15万とも21万ともいわれる大軍を率いて包囲し、そのとき石垣山の城を築いたことから石垣山と呼ばれるようになりました。石垣山に築かれた城が、世に「石垣山一夜城」又は「天正一夜城」と呼ばれる。秀吉が築いた城は、山頂の中心に島の形をとり、島を築いて城のように築き上げ、周囲の地味をばらばらにし、それを見た小田原城の兵が、一夜に崩壊したと思われ、秀吉は、秀吉の包囲によるものです。しかし、石垣山に4万人が籠り、天正18年4月から5月まで約80日籠り、戦った。

秀吉は、この城に淀君や側室や千利休、参陣者を呼び宴会を開いたり、天候の悪化を待たせました。この城は、堀秀政が築いた石垣山の城で、石垣山は石垣山と呼ばれ、長期籠城した本格的な城でありました。石垣山は石垣山と呼ばれ、天正18年4月以上籠り、天正18年5月まで約80日籠り、戦った。



小田原城天守閣から

し、小田原城の西南、石垣城の前衛として陣をした。ところが5月27日小田原包圍陣中に病死し福井の寺に葬られた。早川の高蔵寺にも墓所がある。

石垣山一夜城の構造

石垣山一夜城は最高地点の天守台の標高が261.5メートルで小田原城の本丸より227メートル高く、また、小田原城までの距離は3キロメートルと近く築城にあたり、山頂の林の中に堀や櫓の骨組みを造り、白紙を張って、白壁のように見せかけ、一夜のように見せかけ、一夜のうちに周囲の樹木を伐採したためと言われている。しかし、実際には約4万人が動員され80日間費された。

本営（最初は早雲寺→石垣城）



南北275メートル東西550メートル

後北条五代

北条早雲（1455～1519）

俗名、伊勢新九郎（備前・戦国時代を代表する武将）京都から駿河、今川家に身を寄って、伊豆・相模を攻略、戦国時代の幕を開いた。伊豆韮山で没す享年88歳？→64歳説が強い

北条氏綱（1486～1541）

父、早雲の遺志を継ぎ武蔵、下総へ進出、小田原北条の領国を拡大した。享年56歳

北条氏康（1515～1571）

扇谷上杉を滅ぼし、関東の覇権を握る。領国経営にすぐれた手腕を発揮した。享年57歳

北条氏政（1538～1590）

夫人は信玄の娘 黄梅院。信玄の西上を後援、その没後は信長と連携して、武田勝頼 討伐に加担やがて秀吉に敗れ切腹 享年53歳

北条氏直（1562～1591）

夫人は家康の娘 督姫 下野宇都宮氏を降し、後北条氏の最大の領国を形成、名胡桃城奪取して秀吉と対立し、破れる。家康の助命で高野山にながされる。享年30歳

小田原の歴史

1156年～保元の乱に相模国早川庄について散位有経と争う

1193年～曾我祐成・時政兄弟、頼朝寵臣・工藤裕経を襲い、親の仇を討つ

1335年～足利尊氏、箱根、竹下に新田義貞軍を西上する

1349年～足利基氏 鎌倉公方となる

1457年～上杉定正の家臣 太田道灌→江戸城を築く

1493年～堀越公方足利茶々丸を攻め伊豆へ進出

1498年～早雲茶々丸を討つ

1519年～早雲 伊豆韮山で没する

1523年～北条氏綱2代目 伊勢（氏姓）から北条に改姓

1541年～氏康が3代目

1554年～氏康、駿河国に兵を出して、信玄、義元と戦い間もなく和睦する。

甲斐・相模・駿河・三国同盟の成立

氏政（4代目）に信玄の娘（黄梅院）が嫁ぐ

1560年～氏康・氏政に家督を譲り氏政が小田原城主

1566年～三浦（三崎）に唐船着船する。

1568年～武田信玄、駿河国を侵す。氏政 信玄と絶ち今川氏真を助ける。

1569年～北条氏照（氏政の弟）奥州の伊達氏に狩野筆の扇子10本送る

氏政、上杉謙信と和睦する（越、相、同盟）武田信玄、小田原城

来攻するが攻めきれず撤退、その帰路三増峠で北条氏と戦い、

これを破る（三増合戦）

1580年～氏政・織田信長への従属を決める。氏直・家督を継ぐ

1583年～氏直、徳川家康の娘（督姫）を妻に迎え、同盟が成立する

1589年～豊臣秀吉、氏直に宣戦布告

三増合戦

1569年 永禄12年（1569）10月 甲斐（今の山梨県）武田信玄は2万の将兵をしたがえて小田原城の北条氏康らを攻め、その帰り道に三増峠を選んだ。それを察した氏康は息子の氏照、氏邦、娘の夫 綱成らを始めとする2万の将兵で三増峠迎え討つことにした。ところが武田軍が近づくと北条軍は、半原（愛川町）の台地上に移り態勢を整えようとした。信玄は、その間に三増峠のふもと桶尻の高地に自分から進み出て、その左右に有力な将軍を手配し、家来の小幡信定を津久井の長竹へ行かせて、津久井城にいる北条方の動きを押さえて、また山県昌景の一隊を葦尻根に置いて、いつでも参戦できるようにした。

北条方はそれに満々から攻めかけてきたので、たちまち激戦となった、その時山縣の一隊は志田峠を越え北条軍の後ろから挟み撃ちをかけてきたので、北条軍は総崩れとなって負けてしまった。この合戦中、武田軍の大將、浅井信種は北条軍の鉄砲に打たれ戦死した。北条氏康・氏政の親子は助けの兵を連れて厚木の荻野まで駆け付けて来たが、すでに味方が負けてしまったことを知り空しく帰っていった。信玄は勝ち戦となるや、すぐに兵をまとめ、反畑（今の相模原市緑区 旧相模湖町）まで引き揚げ、勝利を祝う。ともに敵・味方の戦死者の霊をなぐさめる式をとりおこない、甲府へ引き上げたという。現地の看板から

津久井城

「根小屋式山小城」津久井城（築井城「相模原市緑区」）山城は平地の面積が狭いため、城主の館や家臣の屋敷など山麓に置いた。津久井城は地理的には、北方に武蔵国、西方に甲斐国に接する相模国の北西部に位置しています。そして八王子から厚木、伊勢原、古代東海道を結ぶ八王子道と、江戸方面から多摩丘陵を通り津久井地域を東西に横断して甲州街道に達する津久井往環に近く、古来重要な水運のルートであった相模川が眼の前を流れていることから、交通の要衝の地であった。

津久井城の築城は、鎌倉時代に三浦半島一帯に勢力を誇っていた三浦氏の一族、津久井氏（築井氏）によると伝承されているが、その詳細は明らかではない。その痕跡が明らかになるのは、16世紀に入ってからです。

戦国時代、小田原城を本城とした北条氏は16世紀中ごろには、相模・武蔵を領国とする戦国大名に発展しました。そしてこの広大な領国を経営し、敵勢力から守るため、本城の下に支城を設け、支城領を単位とする支配体制をつくった。当時の津久井地域は甲斐国境に近く、領国経営上重視されており、津久井城（城主 内藤氏）は有力な支城の一つとして重要な役割を果たしている。

天正18（1590）豊臣秀吉の小田原攻めの際、北条方の関東の諸城も前後して落城した。津久井城も徳川勢の本多忠勝・平岩親吉の小田原攻められ、落城したと伝えられている。落城の際に戦鬪があったかどうかは分かっていない。落城後は徳川氏の直轄領になり麓に陣屋が置かれ、代官が政務を執っていました。陣屋は寛文4（1664年）に廃止され、その際に津久井城は地域統括拠点としてその機能は終えることになる。

八王子城（小田原城支城）

八王子城は、北条氏照によって築城された山城です。氏照は当初、多摩川と秋川の合流地点にある滝山城（八王子市国史跡）を居城としていた。その支配は、八王子はもとより、北は五日市 青梅 飯野 所沢の一带・南は相模原、大和から横浜の一部まで及んでいた。氏照が居城を滝山城から、八王子城に移した動機は、永禄12年（1569年）武田信玄が滝山城を攻撃し、落城寸前にまで攻められたことから、強固で広大な八王子城の築城を思い立たせたとされている。

築城の時期は明確ではないが、元亀（げんき）から天正始め（1570年代）に築城が開始され、天正年間の中頃に氏照が八王子に移したと考えられる。氏照は18年6月23日、小田原在城の城主氏照を欠いたまま、豊臣秀吉の小田原攻め一隊、前田利家・上杉景勝などの軍勢攻め猛攻を受け、一日で落城してしまった。八王子城の落城は小田原城の開城を促し、豊臣秀吉が天下を統一するうえで大きな影響であつ

た。

佐倉城（千葉県 国立民族歴史博物館）近く

印旛沼を中心に、多くの原始古代遺跡がある。鎌倉時代、室町時代を通じて、下総守護として発展した下総千葉氏は戦国時代になると本佐倉城を拠点として、ここ佐倉千葉が成立、戦国時代末期になると後北条氏の配下となる。後北条氏が豊臣秀吉の小田原征伐で滅亡すると、佐倉城は建設途中で焼かれ、千葉氏も滅した。

後北条2代氏綱と当麻山（無量光寺）相模原市南区

武州・上州・甲州への交通上の要地である市域当麻山（無量光寺）当主（27代智光）に対しての年賀挨拶状は氏綱の書状一通が残っている。（お茶を送ったお礼）相模原市の指定文化財

北条五代後 大久保氏 稲葉氏の継承と時代変動

『江戸時代の小田原城主』

- 第一代 大久保忠世…徳川家康の家臣
- 第二代 大久保忠隣…江戸初期の譜大名（のちに改易となる）
- 第三代 城番時代 …城代を補佐して城門の守衛にあたった役
- 第四代 阿部正次 …上総大多喜より2万石加増で小田原に入府（5万石）
- 第五代 城番時代 …再び城番となる
- 第六代 稲葉正勝 …春日局の子30歳代半ばで病死
- 第七代 稲葉正則 …春日局の孫
- 第八代 稲葉正通 …1685年越後国高田城に国替となる
- 第九代 大久保忠朝…上記翌年3月幕府老中忠朝が下総国佐倉城から10万3千石で入城。第二代大久保忠隣が改易になってから実に72年ぶりに大久保氏は明治まで200年に及び小田原を治めた。

- 第10代 大久保忠増…『元禄地震』本丸・天守をはじめ小田原城全壊、飛び火で焼失
- 第11代 大久保忠方… 藩主となる
- 第12代 大久保忠興…小田原城の破損42か所の修復を願い出る
- 第13代 大久保忠由… 藩主となる
- 第14代 大久保忠顕…『天明地震』天守が傾く
- 第15代 大久保忠真…天守修理につき御厨領村より夫人足の冥加金を徴収
- 第16代 大久保忠愨…『嘉永地震』→小田原城石垣46か所・土居22か所の修復を願い出る
- 第17代 大久保忠礼…官軍が小田原城を接收
- 第18代 大久保忠良…天守・櫓等が900両で高梨町平井清八郎に払い下げられる
- 明治3年（1870） 忠良が新政府へ小田原城廃城を願い出て許可される
小田原城の天守・櫓などが売却され、のちに解体される
- 明治9年（1876） 足柄県が廃止され、その一部が神奈川県に属する
- 大正9年（1920） 国府津—小田原間を結ぶ東海道鉄道熱海線が開通する
- 昭和5年（1930） 御用邸が正式に廃止される
- 昭和13年（1938） 史跡小田原城跡が国指定史跡に指名される
- 昭和35年（1960） 小田原城天守閣が復興される

近世小田原城と史跡整備

1 戦国と近世が複合する小田原城

小田原城は戦国時代、天正18年（1590）に秀吉と対峙した小田原合戦の際には、周囲9キロにわたり堀と土塁で城下を囲んだ総構を構築し、中世最大規模の城郭に発展した。

2. 前期大久保時代・番城時代(1590～1632)

天正18年(1590)、北条氏滅亡後の小田原には徳川家康の三河以来の家臣である大久保忠世が4万石で入封した。その子、忠隣の代には6万5千石へと加増されたが、慶長19年(1614)に大久保氏は改易となり、小田原城も破却された。この24年間を前期大久保時代と呼称している。大久保忠隣改易後の小田原城は、番城となり、元和5年(1619)から5年間、阿部正次が城主を務めたほかは幕府直轄として城代が置かれた。

3. 稲葉時代(1632～1686)

寛永9年(1632)に稲葉正勝が下野国真岡より8万石で入封して稲葉時代が始まることとなる。正勝は徳川三代将軍家光の乳母であった春日局の子で、家光の側近の一人である。しかし、翌年早々の寛永10年(1633)1月大地震が発生し、小田原城は大破した。正勝は震災復興と共に近世城郭としての体裁を整えるための大改修を開始するが、翌11年(1634)1月に急死し、家督を弱冠12歳の正則が相続した。

小田原城の改修は、単なる復旧作業というよりは翌年に予定される将軍家光の上洛に備え、将軍家の宿泊所としての設備拡充としての意味合いが強いものであった。

改修内容は

- (1) 天守閣・本丸御殿・多聞櫓の建設
- (2) 二の丸御殿・御花畑・御茶屋殿の建設
- (3) 大手門西脇に石垣を追加する
- (4) 西の丸及び馬屋 曲輪・本丸全周にわたる石垣化・それに伴って曲輪の平面状を直接的なものに改修される。

稲葉時代の約50年間は、小田原城の近世化工事の時代といえよう。

4. 後期大久保時代(1688～1867)

貞享2年(1685) 稲葉正通(正則の子)は越前高田に転封となり貞享3年(1686)には大久保忠朝が下総国佐倉から10万3000石で入封した。大久保氏は72年ぶりに小田原城主に復帰したことになり、これ以降幕末までの時代と称している。

元禄16年(1703)の元禄地震を始めとする相次ぐ地震災害、宝永4年(1707)富士山噴火による火山灰降下などの大規模災害に見舞われた。

元禄地震は、甚大な死傷者を出すと共に小田原城もまた大破炎上し、天守閣・本丸御殿・二の丸御殿を始めほとんど全ての施設が倒壊、焼失し、石垣、土塁も崩壊し、小田原城は壊滅的な被害を受けた。このように、後期大久保時代は、災害と復興による藩財政逼迫の時代であった。その為、明治維新を迎えると廃城令を待たずして、明治3年(1870)には政府に廃城届を提出し天守閣、櫓は民間に払い下げられ、解体された。城跡は陸軍省の所管になり、二の丸・隅櫓だけが残った。

昭和35年	天守閣(再建)	} 復元
昭和46年	常盤木門(再建)	
昭和57年	史跡整備始まる	
平成2年	住吉橋が架けられる	
平成9年	銅門(あかがねもん)	
平成21年	馬出門	
平成23年	馬屋曲輪	

追記 豊臣秀吉の動き

- 3月1日、後陽成天皇から節刀を賜り、聚楽第から北条氏攻めのため東国に下向。
- 3月3日、近江八幡に着陣。4日、柏原に着陣。
- 3月6日、尾張清州に着陣し、秀次に書を送り、戒めて家康と信雄と軍議して、陣所を堅守させる
- 3月10日、三河吉田に着陣。
- 3月19日、駿府城に入る。翌日、家康長久保より駿府に帰り、秀吉に謁見
- 3月23日、清見寺（清水）。26日、吉原。
- 3月27日、三枚橋城に到着。津軽為信が参陣したため、所領安堵。
- 3月28日、家康と山中城を巡視し、長久保陣に入る。
- 3月29日、小田原へ向け進撃を開始。山中城を秀次・徳川軍、韮山城を織田信雄に攻めさせる
- 4月5日、箱根湯本に移陣。→ この前後に石垣山城築城を命じたか？
- 4月6日、箱根湯本の草雲寺に着陣、諸将を労う
- 4月13日、北政所に返書し、戦況を報じ側室淀殿の下向を促す。
- 4月15日、信雄・家康の北条氏に内応する風説により、両者の陣所を訪ねる。
- 4月、伊豆・相模・武蔵の各地に禁制を下す。
- 5月1日、母大政所に消息を認める
- 5月2日、天皇勅使として、権大納言勅修寺晴豊等を小田原に下向させる。
- 5月27日、佐竹義宣、太田道誉、小田原に至りて秀吉に謁見する。
- 5月29日、陣中に茶会を開く。
- 6月8日、伊達政宗、秀吉に謁見する。
- 6月26日、石垣山城に移陣→ 御殿が完成。天守は、未つか。
- 7月5日、北条氏直、小田原城を出て織田信雄の陣所に投降する
- 7月13日、秀吉、小田原城に入る。家康を関東に転封、織田信雄を改易し、秀次に尾張を与える。
- 7月17日、小田原を發し陸奥に向かう。

上記の記録から、石垣山城築城命令から、移陣まで2ヶ月半、石垣山から離れるまで約3か月在城していたことになる。

参考著書

- 戦国大名 北条氏の歴史 小田原城総合管理事務所編 小和田哲男監修 吉川弘文館
- 北条氏五代と小田原城 山口 博 吉川弘文館
- 北条早雲と家臣団 下山治久 有隣新書
- 戦国大名北条氏 同上
- 小田原城天守閣 特別講演会セミナー資料から
- 小田原城開府五百年のあゆみ